

ジヨベニは、せれしへいるるのしとを考えながら、たまごまの^{あかい}や木の枝で、すっかりきれいに飾^{かざ}られた街を通つて行きました。時計屋の店には明るくネオンの燈がついて、一秒しとに石で「せえだるる」の赤い眼^めが、くるくるつとついたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の^{びん}の蓋^{ふた}に載つて星のようにつくつくり、また向う側から、銅の人馬がゆつくり、ちくまわつて来たりするのです。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスピアガスの葉で飾つてありました。

ジヨベニはそれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはすつと小さかつたのですがその日と時間に合せて鑑をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま^{じいんけい}横円形のなかにめくつてあらわれるものになつて居^ゐりやはりそのまん中には土からくかけて銀河がぼつとけむつたような帯になつてその下の方ではかすかに爆^{ばく}発して湯気でもあがっているように見えるのです。またそのつとるには三本の^{あし}脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立っていました。ちびちびつとるの壁には空しゆつの星座をふしぎな^{けもの}獣^{けもの}や^{へび}蛇^{へび}や^{うなぎ}魚^{うなぎ}や^{びん}瓶^{びん}の形に書いた大きな図がかかつていました。ほくとつに「くんななような^{せう}蠅^{せう}」だの勇士だのそらにきつしり居るだろつか、ああほへはその中をどいまでも歩いて見たらと思つてたりして、はふへほへやうなつて居ました。